

縞稻の越年株より連年出現する白苗、縞稻

及綠稻の歩合に就て（久宗氏の實驗の繼續）

附 一代限の縞稻につきて

笠 原 安 夫

一、緒 言

近藤博士⁽¹⁾等は、大正五年及び大正七年に、純系神力種より突然出現せし縞稻を始源として、大正十年迄毎年ベチグリ栽培をなして、數多の系統を作り、其の縞稻の分離遺傳關係を調査したり。其の結果、縞稻は細胞質遺傳（母親遺傳）にして、縞稻の發生原因は、卵細胞の核外の原形質にある葉綠素を形成すべき有色體（Chromatophoren）の變異に基因するものにして、従つてメンデル則には従はずして、縞稻よりは常に白苗、縞稻及び綠稻を生じ縞稻として固定するものなし。されど綠稻の次世代には綠稻のみを生じて固定し、又白苗は葉綠素なきために早く死す。而して縞稻は綠稻に比して分蘖少く、草丈低く、一穗粒數少く、秕歩合は多きものなりと云へり。又保井博士⁽²⁾によれば「たうもろこし」に生ずるアルビノ（白苗）は綠苗に對して單一劣性にして、メンデル則に従ひて遺傳することを報告せられたり。されど縞苗に就きては記載なし。故に白苗はメンデル則的に遺傳するものと非メンデル則的に遺傳するものと二者ありと云ふべし。

次に久宗氏⁽²⁾は近藤博士等の實驗せし系統につきて、同博士のもとにて大正十四年より昭和四年迄、縞株、綠株を連續越年せしめて、其の株より現るゝ白苗、縞株、綠株の三型の分離の歩合を調査したり。其の結果、縞株よりは常に白苗、縞株、綠株を析出して、其の析出歩合は前に近藤博士等の行ひしベチグリー栽培の結果と大差なきを見たり。又縞稻より析出したる綠稻は、常に綠株のみを發生して縞株は現れずと發表したり。

著者は近藤博士の命によりて、久宗氏の用ひし稻株を昭和四年に繼承して、爾來連續越年せしめ、久宗氏の實驗を繼續して今日に至れり。よりて茲に昭和四年後の結果を追加報告せんとす。

二、試料

大正七年神力より突然に生ぜし縞稻の系統にして、大正十四年より久宗氏が連續越年せし縞株 2/2/3/1/1/3/1 を昭和四年に引續きて實驗に供したり。その内三株を採りて縞株 A₁A₂A₃ となす、故にその株は既に昭和四年には越年五年目の連續株なりき。又昭和五年に縞株 A₃ より綠株を析出したるものゝ中より一株を採りて綠株 C となす。大正五年に、神力より偶發せし縞稻の系統にして、大正十五年より久宗氏が連續越年せしめたる縞株 2/3/1/1/1/1 の親種子を、昭和四年に圃場に蒔きて、析出したる中より、著しき縞株を三株採りて、B₁B₂B₃ となしたり。故に此三株は以前よりの越年株にあらずして、同一系統なるが、昭和四年より新に株として越年したるものなり。又昭和五年に、縞株 B₃ より綠稻を析出したるものゝ中の二株を採りて綠株 D₁D₂ となしたり。

是等の縞株及び綠株の特性を擧ぐれば第一表の如し。

繭株及び緑株の特性(昭和五年度調査)

[illegible]

備考 飼料A、Bは越年採るにより分乗数、総重量等が異なる。

第一表の縞株は越年株にして、緑株は越年株にあらずして、本田にて生育したる株なれば、之等の株の特性を調査して、其結果によりて縞株と緑株の形状の特性を比較するは、當を得ざるが、縞株は緑株に比して、一穗粒數少く、草丈短く、千粒重量輕くして歩合大なるが如し。

三、實 驗

昭和四年十月に、縞株 $A_1A_2A_3$ 及び縞株 $B_1B_2B_3$ をホットに移植し、温室内に入れ十月下旬―十一月上旬に穂の熟するを縞稻の越年株より連年出現する白苗、縞稻及縞稻の歩合に就きて

二四五

待ちて、根部より上位二寸の邊を切斷して、根の枯死せざる様に保ち、其刈取りたる植物の特性調査を行へり。その粃米は翌年五月に、消毒土を入れたる苗代箱に播種して、生ぜし白苗を調査し、更に七月圃場に移植して、生育せし縹株及び綠株の分離を調査せり。以後毎年同じ方法にて植物の歩合を調査し、その粃米は翌年播種して、白苗、縹株、綠株の分離歩合を調査せり。一方溫室のポットに残せし株は、間もなく節より芽生して發育し、溫室内にて出穂するものあれども、之を摘去して、翌年六月に至り圃場に移植して生育せしめ、移植する際大なる株は二―八株に分割せり。越年株の圃場に於ける生育中に縹の有無を調査し、更に十月に至れば二―八株の内任意の一株を探りてポットに移植して繼續株となし、完熟を待ち地上部を刈取りて、其の残りし株より芽生する植物を發育せしめ、前年同様六月に至りて本田に移植し、斯くして毎年繰返せり。綠株C及びD₁D₂は昭和五年十月に新にポットに移植して越年株として採用し以後縹株と同様の方法にて實驗を繰返したり。縹株及び綠株の歩合及び次世代に現れし白苗、縹株及び綠株の分離歩合は第二表の如し。

第二表 越年株(母本)の歩合並に其の越年株の収米を荷きて
現はる白苗、縹株、綠株の歩合

系統	年度	母本世 歩合%	分 離 數	白苗	縹株	綠株	系統	年度	母本世 歩合%	分 離 數	白苗	縹株	綠株
縹株 A1	昭和 五年 年度	3	0	0	0	41.2		昭和 五年 年度	△ 32.11	375	29(1)	10	2.6
			分離歩合%	0	0	100				30.3	7.1		

繭	昭和五年度	42.81	分離数	43	歩	113	14
	分離歩合%		25.3		(83.5)		8.2
株 A 2	六年度	15.52	分離数	207	歩	838	2
	分離歩合%		19.1		81.7		0.2
株 A 2	七年度	21.95	分離数	0	歩	23	0
	分離歩合%		×	0	100		0
繭	八年度	10.33	分離数	77	歩	379	8
	分離歩合%		16.6		81.7		1.7
株 A 3	昭和五年度	33.22	分離数	238	歩	9	228
	分離歩合%		59.1		1.9		48.0
繭	六年度	14.41	分離数	3	歩	0	038
	分離歩合%		0.5		0		91.6
越年床置室にて枯死							
繭	昭和六年度	△ 8.03	分離数	0	歩	0	762
	分離歩合%		0		0		100
株 B 2	六年度	23.14	分離数	870	歩	41	12
	分離歩合%		91.5		4.5		1.0
繭	七年度	33.02	分離数	121	歩	123	5
	分離歩合%		×	83.1	23.5		2.1
株 B 2	八年度	41.96	分離数	310	歩	231	16
	分離歩合%		51.8		42.1		2.8
繭	昭和五年度	△ 38.11	分離数	740	歩	118	15
	分離歩合%		81.8		13.5		1.7
株 B 3	六年度	25.13	分離数	1191	歩	68	19
	分離歩合%		93.1		5.4		1.5
繭	七年度	23.75	分離数	79	歩	47	2
	分離歩合%		×	61.7	34.7		1.6
株 B 3	八年度	61.81	分離数	686	歩	93	40
	分離歩合%		83.9		11.3		4.9
繭	昭和六年度	△ 3.93	分離数	0	歩	1	630
	分離歩合%		0		0.2		93.9

繭粕の越年株より連年出現する白苗、繭粕及糠粕の歩合に就きて

株 C					繭 株 D ₁					繭 株 D ₂								
七年度	46.41	分離數	0	0	102	七年度	37.85	分離數	0	0	76	七年度	31.03	分離數	0	0	100	
		分離歩合%	×	0	100			分離歩合%	0	0	100			分離歩合%	0	0	100	
八年度	19.42	分離數	0	0	475	八年度	14.81	分離數	0	0	640	八年度	27.15	分離數	0	0	512	
		分離歩合%	0	0	100			分離歩合%	0	0	100			分離歩合%	0	0	100	
繭 株 B ₁					繭 株 D ₂					繭 株 D ₂								
昭和五年	△ 28.05	分離數	378	33	5	昭和五年	△ 2.47	分離數	0	1	768	昭和五年	△ 2.47	分離數	0	0.1	99.9	
		分離歩合%	90.4	8.3	1.3			分離歩合%	0	0.1	99.9			分離歩合%	0	0	100	
六年度	60.80	分離數	402	50	24	六年度	31.03	分離數	0	0	41	六年度	31.03	分離數	0	0	100	
		分離歩合%	85.6	10.3	4.2			分離歩合%	0	0	100			分離歩合%	0	0	100	
七年度	80.01	分離數	8	4	0	七年度	27.15	分離數	0	0	512	七年度	27.15	分離數	0	0	512	
		分離歩合%	×	66.7	33.3	0			分離歩合%	0	0	512			分離歩合%	0	0	512
八年度	72.08	分離數	387	72	14	八年度	27.15	分離數	0	0	512	八年度	27.15	分離數	0	0	512	
		分離歩合%	81.0	15.9	3.1			分離歩合%	0	0	512			分離歩合%	0	0	512	

備考 (1) 昭和五年度母本批歩合……は昭和四年に開墾より株を掘取りて、ボットに移植して越年せしむべき株の地上部にして、

昭和四年十一月に調査せしものなり。六年度の母本批歩合は昭和五年十一月に調査せしものなり。以後之に準ず。

(2) ※……一見繭稻の如き繭株にして、葉には繭なく或は又少数の繭部なる繭にて殆んど繭は見えず、然るに隠部には繭あり。

顯著なる繭あり。

(3) ×……苗代種にて芽生の際風害を受けたる苗に分離数を信用出来ず。

(4) △……越年株の批歩合に非ずして、稻米より發育せし株の批歩合なり。

第二表の批歩合を見れば、縞株 $A_1 A_2 A_3$ 並に $B_1 B_2 B_3$ は共に、綠株 C 及び $D_1 D_2$ に比して大なり。又綠株も越年株とすれば著しく批歩合大となれり。これは不自然なる環境の影響のためなり。即ち溫室にて越冬せしめて圃場に出し、又溫室に入れる等不自然なる環境に生育するために、後れ穂、無効分蘖等を多く生ずる爲めなり。

縞株 A_1 は昭和五年に於て白苗、縞株を生ぜず、唯綠株のみを發生したるは注意すべし。而して不幸にして越年株が溫室にて枯死したるにより、實驗を繼續すること能はざりし。縞株 A_2 は常に白苗、縞株、綠株を分離せり（昭和七年を除く）。然しこの縞株は一見綠稻の如くして、一株の葉、數十葉の内僅か上部の數葉のみ肉眼にては認め難き細條を一條乃至二、三條有するものなれど、穂軸及び粃米にては著しく顯著なる縞を有するなり。又穂軸及び粃米に縞顯著なるものにて、其稈の葉には一枚も縞を見ることの出來ざるものもありたり。而して斯る縞株は發生歩合多くして六六、五一八一、八%に達する。

白苗の發生歩合は少くして一六、六%—二五、三%なり、綠株は白苗よりも發生少くして其の發生歩合は〇、二—八、二%なり。

縞株 A_3 は A_2 と異りて、葉にも縞は顯著なるものなり。昭和五年には白苗歩合五〇、一%にして相當多數に析出したるに拘はらず、縞株は極少數にして、僅かに一、九%なり。昭和六年には白苗も少數となり〇、五%分離したるのみにして、縞株は一株も生ぜず、綠株のみになりたり。而して不幸にして昭和七年には越年株枯死したる爲めに分離歩合を見ること出來ず。

元來縞株 A_2 は A_3 と同系統にして A_3 に似たる縞なりしものが、四年の越年株に於て右の如き縞株となりたるは、畢竟前

年度溫室中に置きたる株を本田に移植するに際し、分割して生育せしめたるが、昭和四年に偶然に芽條變異を起したるものをポットに移植して實驗に供したるによるなり。

綠株Cは常に綠株のみを生じて固定せり。

縹株B₁B₂B₃は、昭和四年に2.3.1/1.1/1/1の越年株の籾米を蒔きて析出したる内より著しき縹株を取りて、試料としたるものにして、常に白苗、縹株、綠株を分離して、甚だ白苗歩合が大なり。

綠株はD₁D₂常に白苗を生ずることなく、縹株を昭和六年に各々一株宛生ぜしのみにして、七、八年には常に綠株のみなり。

縹株及び綠株が、切株より芽生ずる際に、又は本田にて生育中に變化して、縹株が綠株に、或は綠株が縹株に變化するや否やを観察したる結果は第三表の如し。

第三表 縹株及び綠株の越年株の本田に於ける性状

	昭和5年		昭和6年		昭和7年		昭和8年		備考
	縹株	綠株	縹株	綠株	縹株	綠株	縹株	綠株	
縹株A ₁ (越年株)	2	0	2	0	8	0	5	0	* 縹株が綠株となり、或は綠株が縹株となり。
" A ₂ (")	2	0	2	0	8	0	5	0	
" A ₃ (")	2	0	2	0	8	0	5	0	

綠株B ₁ (越年株)	3	0	2	0	4	0	②	0	② (1) 和人と綠株と比
" B ₂ (")	2	0	2	0	3	0	7	0	② (1) 和人と綠株と比
" B ₃ (")	2	0	2	0	7	0	5	0	② (1) 和人と綠株と比
綠株C (越年株)			0	2	0	7	0	5	
綠株D ₁ (越年株)			0	2	0	8	0	5	
" D ₂ (")			0	2	0	8	0	5	

第三表によれば縞株より綠株に、又綠株より縞株に變化したるものは無けれど、縞株B₁の一株が昭和八年に於て綠株に近きものとなりたるは注目すべし。

四、考 察

茲に第二表の結果を系統圖表にて現せり。(折込表)

元來A₁A₂A₃は2/2/3, 1/1, 3/1系統にして、B₁B₂B₃系統は2, 3/1/1/1/1/1系統なり。近藤博士等のペチグリー栽培及び久宗氏の實驗結果を記せば第四表の如し。

第四表 ペチグリー栽培と越年栽培との比較

Family	縞の三型	白苗	歩合	縞株	歩合	綠株	歩合
--------	------	----	----	----	----	----	----

縞稻の越年株より連年出現する白苗、縞稻及綠稻の歩合に就きて

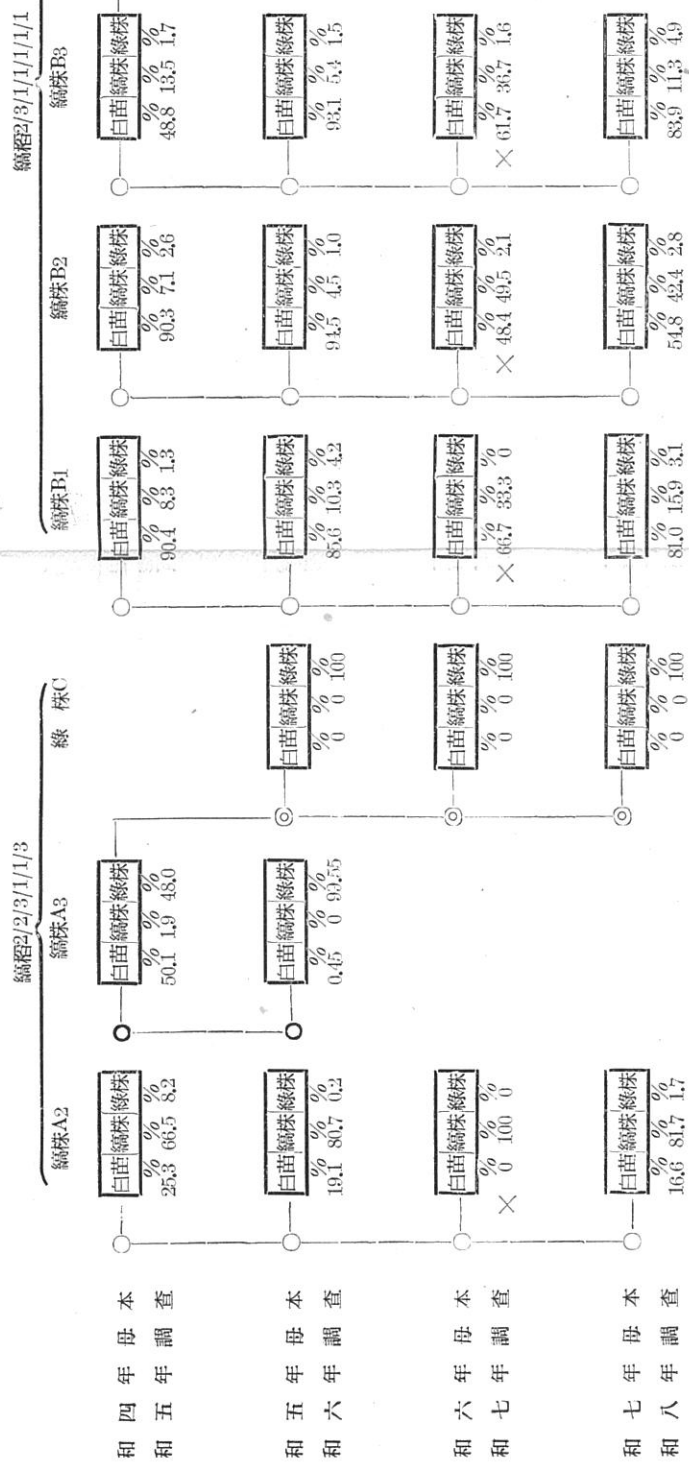
ベデグリー栽培結果の縞稻 2/23/1/1/3/1 (3ヶ年平均)	63.4%	33.1%	3.6%
連年越年栽培結果の縞稻 2/23/1/1/3/1 (4ヶ年平均)	61.4	25.6	11.0
ベデグリー栽培結果の縞稻 2/23/1/1/3 (3ヶ年平均)	65.6	28.1	6.0
連年越年栽培結果の縞稻 2/23/1/1/3 (4ヶ年平均)	62.0	26.7	11.3

久宗氏の實驗と(四ヶ年の平均)ベデグリー栽培の結果は大差なし、然るに本實驗は縞株 A_1 は昭和五年に縞株のみを生じて白苗、縞株を生ぜず、以後枯死したるにより不明なり。縞株 A_2 は縞の状態は既述の如く變化して、白苗歩合少くして、僅かに一六・六一・二七・七%に過ぎず。一見縞稻の如き縞株の發生歩合多くして六六・五一・八一・七%に及べり。斯る縞株は昭和四年度の越年株より芽生變異によりて偶發して生じたるものなり。以後四ヶ年間同様の縞株を生じたり。(但し極少數は葉にも著しき縞を生ず)縞株は僅少にして〇・二・一八・二%を生ず。

縞株 A_3 は昭和五年には五〇・一%の白苗を析出せしも、六年度には僅に〇・五%となりたり。而して縞株は無くして殆んど全部が縞稻になりたり。

斯くの如く A_1 A_2 A_3 系統は、前回迄の實驗(久宗氏)に比較して、大なる差異を示せるは、古き越年株にして、昭和五年にて越年六年目となりたるものなる故に、毎年芽生する毎に、前年よりは多少變化したる縞を現すによる。即ち切株より芽生する際に、葉綠體を含むこと少き莖葉よりも、葉綠體の多き莖葉が强健なるにより、即ち著しき縞よりも縞葉

第一圖系統圖表



○綿株 ○根軸及び羽根に綿着しくて、葉には殆んど綿着き爲に信用出來ず。 ◎綠株 ×苗數少き爲に信用出來ず。

に近き縞の莖葉が増して發生する故に、從つて次世代に現るゝ白苗、縞株が少くなり、綠株が多くなるものと思はる。次のB系統に於ても多少右の傾向が認めらる。第三表にて明なる如く、Bの越年株が昭和八年に於て四株に分割せし内、一株は綠株に近くなりたるなり。故に越年株は年數が經るに從つて綠株に近づくものと云ひ得るなり。

$B_1 B_2 B_3$ 系統は、同系統のベデグリー栽培及び久宗氏の實驗に比して著しく白苗が多く析出して七三、二—九一、%なり。これは同一系統より生じたるものなれども、久宗氏のは $2/3/1/1/1/1/3$ にしてB系統は $2/3/1/1/1/1/1$ なり。即ち姉妹系統に當る。而して $B_1 B_2 B_3$ は久宗氏の實驗せし連續越年株にあらずして、新に昭和四年に析出せる著しき縞株を選出したるものなり。略三株は同様なる白苗、縞株、綠株を析出し、又毎年三型の分離歩合に大差無けれど、年を経るに從つて白苗を減じ、縞株、綠株を増す傾向を有す。之はA系統につき論じたと同じ理由によるものと思はるゝなり。越年株の次世代の白苗、縞株、綠株の分離歩合は、其の母本の縞の状態に大なる關係あり。即ち葉綠素なき白條斑の縞を多く有する莖葉の部分より生じたる粗米を蒔きて現るゝ白苗、縞株の歩合は、葉綠素なき白條斑を少く有する莖葉の部分に生じたる粗米より發生する白苗、縞株の歩合よりは大なるなり。

綠株 $D_1 D_2$ には白苗を一回も生ぜず。只縞株を一株生じたるは、普通圃場に於て普通種より突然變異によりて縞稻を發生する程度のものにして、突然變異によりて生じたるものと思はる、故に縞系統より生じたる綠株は固定するものと思ふべし。之は久宗氏の實驗結果と同一なり。

五、摘

要

縞稻の越年株より連年出現する白苗、縞稻及綠稻の歩合に就きて

一、近藤博士等が大正五年及び大正七年に、神力種より発見したる縹株をば久宗氏は大正十四年度より連年越年株となして、其の株より生ずる種子を蒔きて生じたる白苗、縹株、縹株の歩合につきて實驗せり。本實驗は久宗氏の實驗の繼續なり。而して $A_1 A_2 A_3$ 系統は久宗氏の用ひし越年株を其儘試料として採用せり。B系統は越年株其の儘を採用せずして新たに昭和四年縹株2/3/1/1, 1/1/1の越年株の種子を蒔きて析出したる縹株の顯著なるものを試料とせり。

二、 A_1 には昭和五年に白苗、縹株を生ぜずして全部縹稻を生じたり。

三、 A_2 は昭和四年に於て芽生變異によつて莖葉に縹が不顯著にして、穂軸には著しきものに變化したり。而して A_3 は毎年白苗、縹株、縹株の三型を發生すれども不顯著の縹株が最も多數にして、白苗、縹株の順に發生せり。其の三型發生歩合は毎年略一定なり。

四、 A_3 は、昭和五年には白苗、縹株、縹株の三型を發生したるも、六年には殆んど縹株のみを生じ、白苗極少數にして縹株を發生せず。

五、 $B_1 B_2 B_3$ は常に同程度に三型を分離し、白苗最も多く縹株、縹株の順に發生す、而して毎年大體分離歩合は一定すれども、年を経るに従つて白苗を減じ、縹株、縹株を増す傾向あり。

六、前述の如く(1)縹稻の連續越年せし株よりは白苗、縹株、縹株を殆んど一定したる割合に生ずるものと、(2)白苗を減じて、縹株、縹株を増す傾向のものと、又(3)縹株のみを生ずるものとありし。これは越年株の切株より莖葉が芽生する際に、葉綠體を多く含む部分の發生、生育が旺盛なるためりなと思はるゝなり。

七、縹稻より生じたる縹株の連續越年株の粗米を蒔きて現はる、次世代は縹株を生じて固定す。されど極めて稀に縹株

を偶生す。白苗を生ずること無し。

八、縞の越年株は緑株に變化するもの無かりしも、漸次に縞多き莖葉よりも、緑の莖葉に近づく傾向を有す。これ六に於て述べたる理由によるなり。

九、緑の越年株が芽生によりて縞縞に變化することなし。

"	" (2)	11	58.7	18.3	38.0	31.2	3.8	33.0	51.0	60.3	0	14.1	5.8	6.3
力 (照照)	17	83.7	33.5	47.2	43.6	4.1	30.9	79.4	96.7	0	19.6	7.3	4.0	
肥 (")	15	82.6	34.0	48.6	41.6	4.7	30.0	92.2	93.8	1.4	19.4	7.3	2.6	

備考 *……不稔歩合なり。

第一表によれば、偶發せる縞株は其の姉妹の綠稻（對照）に比較して、分蘗數少く、總重量は小にして、穀重少く、一穗粒數は少くして、稈長及び穗軸も短くして、靴歩合は對照より大なり。旭には芒を有すれど、偶發せる縞株には無かりし、斯る形態的特性の悪しきは近藤博士等の結果と同一なり。

三、縞株の次世代の分離

縞株の籾を蒔きて、縞株及び白苗、綠株を分離するや否やを調査したるに、いづれも綠株のみを生じて、白苗、縞株を分離したるものなし。其の結果は第二表の如し。

第二表 旭、前力及び不稔密により出現せし縞株の次世代の分離(昭和六年調査)

試 料	苗 代			本 田			
	總苗數	白苗數	縞苗數	總株數	縞 株	綠 株	縞株歩合
不稔密により生ぜし縞稻	21	0	21	18	0	18	0
旭より生ぜし縞稻 (1)	372	0	372	362	0	362	0

縞稻の越年株より連年出現する白苗、縞稻及綠稻の歩合に就きて

縹稻の越年株より連年出現する白苗、縹稻及縹稻の歩合に就きて

材料	(2)		(3)		(4)		(5)	
	白苗	縹苗	縹苗	縹苗	縹苗	縹苗	縹苗	縹苗
神力より生ぜし縹稻	410	0	410	380	0	380	0	0
神力より生ぜし縹稻	614	0	614	624	0	624	0	0

備考 *……不稔株なり。

第二表によれば、母本は相當に著しき縹稻なりしにも拘はらず、次世代に白苗も縹株も發生せず。よりて母本を越年株となして保存し、昭和六年度に再度越年株の粃米を採りて、昭和七年に蒔きたるも、六年度と同様に白苗、縹株を發生せず。

第三表 旭、神力不稔稻Cの越年縹株の次世代の分離(昭和七年調査)

試料	苗代			本田			
	白苗數	縹苗數	縹苗數	縹株數	縹株數	縹株數	縹株歩合
不稔稻Cより生ぜし縹株(越年2年目)	21	0	21	22	0	22	0
旭より生ぜし縹株(1)(越年2年目)	81	0	81	77	0	77	0
神力より生ぜし縹株(越年3年目)	417	0	417	400	0	400	0

備考 *……不稔株なり。

四、越年株の性状

不稔株Cより生ぜし昭和六年の縹株の越年株は、前年昭和五年に切株より芽生して、發育したるものは縹株となりし

も、二年目即ち昭和七年には最早縞葉なくして普通の不稔株となりたり。

旭より生ぜし縞株(1)は昭和六年の越年株は縞株となりしも昭和七年には緑株となりたり。

旭より生ぜし縞株(2)及び神力より生じたるものは、既に昭和五年に切株より發生して、昭和六年に生育しる越年株は緑株となれり。

五、考 察

普通圃場に於て縞株は屢々突然的に發生するものにして、又不稔稻よりも發生することは既に近藤博士等の實驗によりて明なり。著者は昭和五年に純系神力及び旭より偶發せし縞稻を試料として、次世代に縞を遺傳するや否やを調査したるも、この縞稻は一代限りにして遺傳することなかりし。又其の株を越年すれば、一年目には縞株となりしも、二年目には既に縞葉消失して緑株となりたり、又一年目にては縞株となりたるものあり、不稔稻の研究試料の内のC系統、(大粒有芒)にして常に不稔稻を生じ固定する系統)よりも、一株不稔稻にして縞株となりしものを蒔きしが、縞稻、白苗を析出せずして、不稔稻となりて、不稔性を遺傳したるが、縞の性質は遺傳せず、一代限のみにて次世代には傳はらざりし。而して其の株より芽生したる越年株は一年目には縞株となりしが、二年目には既に縞葉なく不稔稻に還元せり。故に屢々圃場にて偶發する縞稻は遺傳せず一代限りのもの多しと云ふべし。

六、摘 要

縹稻の越年株より連年出現する白苗、縹稻及綠稻の歩合に就きて

二六〇

一、縹稻は屢々突然的に發生するものにして、昭和五年に純系旭及び神力に出現せし縹稻の遺傳を調査せしに、いづれも一代限りにして遺傳せず。

二、大粒有芒不稔稻C₁より發生せし縹稻も、一代限りにして、縹の性質は遺傳せず、而して不稔性は遺傳せり。

三、此等の縹稻を越年株として保存せしに、早きは一年目又は二年目には元の綠稻に還元せり。

附記 前記實驗は近藤博士の指導のもとにて施行したるものにして茲に深謝の意を表す。

文 獻

一、近藤萬太郎、武田元澄 縹稻の研究 農學實驗 第二七七號 四四三—四六二頁、大正十四年十二月

二、久 宗 壯 縹稻の連續越年株より現はるゝ白苗、縹稻及綠稻の歩合に就て 農學研究 第十五卷 二九〇—三〇〇頁 昭和五年七月

三、保井 コノ たうもつしの遺傳研究(承前) 實驗結果其七 アルビノ(Albino)の遺傳及びそれと他のジーンとの關係 植物學雜誌 第四十七卷 第五六三號 七五五—七六六頁 昭和八年十二月

(昭和九年五月一日 大原農業研究所)